大地

第　67　号
2023.3.10.発行

浄　國　寺
上越市寺町3丁目194-10
☎025-523-5724

【俳句】

山崎　睦

新樹光意外に小さき虚子の墓

香水の香りの中にすれ違ふ

正し見る八十路の姿初鏡

老いてゆくことも喜び梅の花

春嬉し雪の高田に住めばこそ

念仏の日々とはゆかず花八ツ手

句集『朝の光』より
平成十一～十三年

判断と決断

山崎隆史

ある時、故野村克也氏が「自分の中に判断基準が無い時、判断材料が不足している時に必要なのは、判断じゃなく決断だ」というような事を言っていて、感銘を受けました。

これは、目隠しして二種類のワインを飲み高価な方を当てる、というテレビの企画で、野村氏が言った言葉です。文脈上「ワインの事は詳しくなくて味や香りでは判断できないので、勘で決断する」という内容を回りくどく表現したもので、あまり格好よくはないのですが、文脈を無視すればとても良い言葉です。

新型コロナ感染症が流行り始めてから三年が経ちます。五月には分類を2類から5類へ引き下げるなんて話もあります。感染者数は増えたり減ったり、全体としてまだ多いと思いますが、高齢者や持病のある方でなければ感染してもそうそう重症化しない（人によってはワクチンの副反応の方が重い）事もあるのか、感染対策にそんなに目くじら立てなくても良いのではないかという雰囲気が出ています。私個人としては、家族に病気持ちがいるので感染したくないですし、ご門徒の方々に感染させたくないですし、引き続き慎重に行動するつもりです。

新型コロナ感染症が流行り始めた頃は、どういう病気なのか、どのように感染するのか等々、分からない事ばかりでした。ある程度の事が分かってからも、「変異株」なるものが出てきたりしましたし、そもそも、どんな対策をすればどの程度感染を防げるのか、感染防止と経済対策のバランスをどうすべきかなど、判断が難しい事ばかりです。

そんな中、今まではあまり目にする事の少なかった色んな県知事とか府知事とか道知事、あるいは世界保健機関の事務局長が、様々な事を決めたり情報を発信したりしました。中には明らかに誤った選択をしてしまったり、失言したりという事もありました。しかし、空前の事態で判断材料が不足している中で、次々と決断を迫られるのでしょう。まさに「判断じゃなく決断」です。

彼らに文句はつけるし批判を控えたりもしないけれども、自分があの立場になったら、と考えるとぞっとします。決断の連続でストレスが溜まり、胃に穴が開く事は間違いないでしょう。「長」という立場の方々が様々な決断をしている事に対し、敬意を持ちたいと思います。

私は決断が苦手ですが、必要な時には決断できるようになりたいです。（なるべくそんな立場にはなりたくないものですが）

無為自然のふるさと

山崎隆昌

金子大榮先生が亡くなられて四十一年になります。享年九十六歳、昭和五十一年十月二十日がご命日。

お生まれは新潟県高田町（現 上越市）最賢寺、十七歳で京都真宗中学に入学されてから逝去されるまでの九十六年、その大半を大谷大学教授として講義、研究著作に専念され、また全国各地に講演に歩かれ、まさに弥陀本願聞思一筋のご生涯でした。

ご逝去された同じ年の初秋、父と伯父が連れ立って京都下鴨のお宅（聞思庵）をお訪ねしております。先生は高田からの来訪をとても喜ばれたそうです。

その折、先生は「ふるさと高田へ帰りたい」としみじみと話されたと帰宅した父からの話

わたしは、もう一度ふるさとへ帰りたい
としきりに思います
ふるさとには、山があり、川があります
からなあ
ふるさとには、友達がおりますから
そして、ふるさとには、墓がありますか
らなあ

先生が「ふるさとには、山があり、川がある」と言われる山は、妙高山であり南葉山、金谷山でしょう。川は荒川（現 関川）であり青田川、儀明川でありましょう。

私たちは、旅の帰路、車窓から妙高山の姿を見出したときホッとした懐かしい気持ちが自ずと拡がるのを感じます。この気持ちの拡がりを大袈裟な言い方をすれば、生を受けてから、ふるさとの山に温かく育まれ、包み込まれるように過ごした記憶が、ふるさとの山川に出会い心に安堵感を覚えるものと思うのです。

ふるさとの友への思いも、同じ大地に生を受け、交わり結ばれたふるさとでの交流が、大切な記憶として今の自分に郷愁を与えてくれるのでしょう。

金子先生の言われるふるさとの墓の事は、現代においてとても大切な課題です。

私は、墓は「我が命のふるさと」と考えますが。……　何時か本稿とは別の視点で「墓」について述べてみたいと思っています

先生はその著『浄土の諸問題』の中で次のように述べておられます

「郷里をもつものに取りては、たとえ郷里を離れることがあっても、さびしくはありません。遠く旅することのできるのは、帰るべき家郷があるからです。したがってその人に取りては、郷里を離れること遠ければ遠い程、かえって郷里が懐かしめるものとなるのでありましょう。そのように人間生活を旅と観ぜしめるものは、無為自然の郷土であります」

心のふるさとである無為自然の郷土があるから、有為流転する私の人間生活を旅と観ることが出来、有為流転の人間生活に意味を与えてくれると述べられるのです

「ふるさとは遠きにありて思ふもの」（詩『小景異情』）と詠ったのは室生犀星ですが、犀星には次掲の『ふるさと』という素敵な詩があります。

ふるさと

室生犀星

雪あたたかくとけにけり
しとしとしとと融けゆけり
ひとりつつしみふかく
やわらかく
木の芽に息をふきかけり
もえよ
木の芽のうすみどり
もえよ
木の芽のうすみどり

高田の地も間もなく雪解け、樹木が一斉に芽吹き、無為自然のうすみどりの美しさに心和む季節を迎えます。

戸惑った理由

山﨑　直子

最近の若者はＴＶを見ない、とよく聞きますが、じゃあやっぱり私は若くはないなあと思う程度にはＴＶを見ています。報道にドラマにバラエティに、無数に増えたチャンネルを変えながら片手間につけておくのも日常の事ですが、去年放映していた夜の番組で「ん？」と思う表現を耳にしました。中堅くらいになろうかという芸人さんの漫才の中で何の流れか、各宗教に話題が及びます。

「じゃあさー、仏教をつくったのはブッダだけどさー」

さらに続いて

「キリスト教をつくったのはイエスだけどさー」

それぞれの「だけどさー」の後がどんなネタだったかは一切覚えていないのですが、それはおそらくこの「つくった」という表現に対しての違和感があまりに大きかったからだと思います。

つくった、って何？

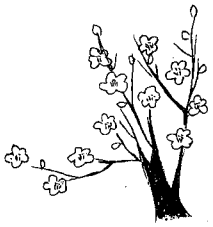
作る・造る・創る、普段目にする漢字のどれにあてはめてもしっくりこず、ならそもそも何と表現していたかと考えてみると「開く」という言葉がありました。仏教を「開いた」のはブッダ。うん、「つくった」よりずっとしっくりきます。浄土真宗を「開いた」のも親鸞聖人ですものね。思いついて東本願寺のホームページを覗いてみると、

元々、ブッダという言葉は「目覚めた人」という意味の普通名詞です。特定の誰かを表しているわけではありません。インドの古代で言えば、目覚めた人はみんなブッダです。

とあります。え、みんなブッダ？と驚いた面もありますが、今自分が生きる社会の仕組みや慣習や常識を空っぽに戻して、まっさらな目で世界を見てみることはそうそう容易なことではないように思います。多分私にはちょっと無理。でも、無理という自覚があるからこそ聞くべき教えがあるのだろうとも思えます。「つくった」という表現に対して違和感を覚えたのも、そこに潜む「捏造」とも受け取られかねない語感に対してのことだと思うのですが、少なくとも、「目覚めた人」という表現は私たちが気付けずにいることに目を向け、それを指し示して下さる存在のことなのだろうと思うことが出来ます。無用な不安や迷いを抱かなくていいのだと思うことが出来ます。つい目の前のことに振り回されてドタバタと暮らしてしまいがちな私の所にも、いつでも仏様の教えが待っていて下さるのだなあと思うとちょっとホッとするような、なんだか申し訳ないような。

信仰心というといささか大袈裟になりますが、穏やかな気持ちで手を合わせる先があるというのは有難いことです。そしてそれは多分、因縁やら怨念やら祟りやら地獄やら、煽られた不安によって無用に高いツボや印鑑を買うこととは遥か遠い所にあるものです。念のため。あ、むしろそれを「捏造」って言えばいいのか。

物忘れか認知症か



七十才を過ぎ物忘れがひどくなると認知症が心配になる。ある時慈恵医大の繁田医師が物忘れと認知症について次のように話された。

高齢者の方が一人で留守番されているところへお客が菓子折りをもって訪ねてこられた。家人が夕刻帰り、菓子折りを見て「誰か来られたの」と留守番の高齢者に聞かれた。

答え①「誰か来たみたいだけど忘れた」

答え②「この菓子折り何だね分からんわ」

面白く、解りやすい例え話である。

さて、私は①か、②か、十月には運転免許の更新で汗をかくのですが

（隆昌記）

ワン公物語

―華のつぶやき―(27)

山崎　華（慎子代筆）

私は華。一体いくつになったのやら。男の子だったのか女の子だったのか。ヒトだったのかワン公だったのか。そんなことはどうってこともないような気がしている。

そして“そこ”にいなくなっても、こうしてつぶやくことができるって嬉しい！

でも代筆者の母さんは少し後ろめたいんだって。『大地』の発行の後、少なからぬ人達が感想やお礼を伝えて下さるのだけれど「慎子さんの優しさが……」「慎子さんにこんなに愛された華ちゃん……」等々書いてあるのを読む度、冷や汗をかくらしい。

自分が決して優しくはないことを、いち番良く知っているのは母さん自身だから。私のことだってそれは可愛がってくれたし、面倒もみてくれたのだけど、母さんにすれば結構ほったらかしにしていたよね、と思うのであるらしい。

十才を過ぎた頃から私の活動量は減って行き、逆に眠っている時間が長くなっていた。その頃、ナオコ姉さんが家族になってくれた。（つまりタカフミ兄さんと結婚して）

母さんとナオコ姉さんはウマが合い、母さんの興味は明るくて楽しいナオコ姉さんに傾いて行ったのだった。

私の老化とそういうことが重なって、母さんはナオコ姉さんとのコミュニケーションにいそしんだ。その時は、私への後ろめたさなどさほど感じていなかったのだろうけど、私がいなくなって、次第にあゝあの時もっと遊ぶんだったと思うみたいなのだ。

母さん大丈夫だってば。私にすれば眠い時は眠らせてもらう方が良いのだし、同居犬の立場からしても家族の確執なんか見たくないのだから。二人してふざけ合ったりしている様子に実は安心していたんだよ。

話は変わるけど昨夜の母さんには驚いた！真夜中に、突然歌を歌いだすんだもの。前の日母さんは止せば良いのに夜のテレビ放送で怖い番組を観てしまったのだ。「寝る前にこんなの観るんじゃなかった」と軽い後悔と共に眠りについた母さん。ところがどんな夢をみたのやら、夜中に突然ベートーベン先生の交響曲第九番「歓喜の歌」のメロディを歌い出したのだ。

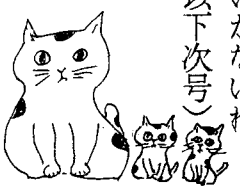
驚いたのは隣で眠っていた父さん。クラシックが大好きなのはむしろ父さん。しかもベートーベンが大好きで、若い頃は年末には度々演奏会に足を運んでいたものだった。

勿論、当の母さんは自分が眠りの中で第九を歌ったことなど全然覚えてなんかいない。母さんは鼻歌が好き。気が付くと何か口ずさんでいる。でも、ナオコ姉さんには「それは何の曲？編曲したの？」と軽く揶揄される位。かなりひどい代物らしいのだけど。私は母さんが気分良さそうに歌っているのは心地よいから、割に気に入ってんだけどね。母さんのジャンルは、童謡、小学唱歌、歌謡曲、民謡や演歌も少々。ただ残念なことに全曲を覚えている歌がとても少なくて、大体が中途半端。正に鼻歌そのもの。どこにも第九を口ずさむ要素はないと思うのだけど。生き物の脳ってつくづく不思議（マ・イイカ）

私って今年は三回忌なんだって。睦おばあちゃんは十三回忌。三智おばあちゃん（母さんの母さんネ）は三回忌。

母さんも、みんなも私達を時々は思い出して忘れないでね。

確かに今生きている人達が大事ではあるけれど、先に逝った人達が残し伝えてくれたことが沢山々々あるでしょう。そして死ぬのが寂しいことのひとつは、残された人達に忘れられるのではないかという不安が大きいんだって。だから時々は思い出してね。

忘れられてもマ・イイカとはいかないね。

（以下次号）